

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

## ドはド? (その1)

ある小学校での授業風景。

教師:「さあ、みんな今日はヘ長調についてのお勉強をしましょう。」

児童:「へ? 長調?」

教師:「そう。今までみんなが見てきた楽譜は八長調だったので、ここ(C3を指す)をドと呼んできましたが、今日勉強するヘ長調では【ファがド】になります」

児童:「ファがド?」

教師:「そう。そのためには【シにフラット】がつくのよ」

\*\*\*\*\*

実際にはもっとややこしいのですがこれに近い会話が全国の小学校で行われているのです。

この会話から子どもたちがヘ長調について理解できるとは到底考えられません。

混乱原因の一つは、【ヘ】長調で使われた【ヘ】という【音名】が【ハ】長調の学習で正しく扱われたかということです。

戦前の音名唱では「日の丸」を「八八二ニホホニ・ホホトイト・イトトホ八二・トトホ八ニホ八」と歌わせました。

しかし、この曲を二長調で歌うときは「ニニホホ嬰へ嬰へホ・嬰へ嬰へイイロロイ・ローイイ嬰へニホ・イイ嬰へニホ嬰へニ」となり特に【嬰へ】の発音は「えいへ」2音節となり音楽のリズムと一致しません。ちなみに【嬰へ】という言い方は雅楽の呂旋等で用いた「嬰 = #」の概念を無理矢理八二ホにくっつけた先人の知恵であったこともつけ加えておきます。

このように音名唱は音楽にはつきものの【移調】という場面に極めて不利であることが指摘され、【ひふみ唱】も行われるようになりました。

「ひひふみみみふ・みみいむむい・むーいみひふ・いみひふみひ」数字譜では「1 1 2 2 3 3 2・3 3 5 5 6 6 5・6ー5 5 3 1 2・5 5 3 1 2 3 1」となり、これは現在でも大正琴やハーモニカの楽譜として健在です。

ただこの数字譜にしるひふみ譜にしるシャープやフラットの呼び名がなかったので音名唱程の頻度では出てこないにしても変化音の呼称はナチュラル読みのままが普通でした。

そもそも このドレミ等の階名の概念は11世紀頃できたと言われていました。A=440Hzの基準音の設定される前はディアパーソン(Diapason)と呼ばれる基準がありました。それはパイプオルガンの左端の鍵盤(C1)を8

フィートの長さのパイプにするという基準です。8フィート律と呼ばれるこのピッチに対してそれより1オクターブ高い律を4フィート、1オクターブ低いものを16フィートとしてストップの名称に添付してきました。これが西洋における基準ピッチの原型ですが、グイドーが次の「聖ヨハネの賛歌」のそれぞれのシラブルの歌い出しの(Ut, re, mi, fa, sol, la)の高さが異なるのを利用して今日のドレミ唱法が誕生したことはみんなが知っていることです。

Ut queant laxis  
resonare fibris  
mira gestorum  
famuli tuorum  
solve polluti  
labii reatum  
sancte Joannes

Hymn 2th 聖ヨハネの賛歌

U T que - ant lax - is re - sona - re fib - ris

Mi - ra ges - tó - rum fá - mu - li tu - ó - rum.

Sol - ve po - llu - ti la - bi - i re - á - tum Sáncte Jo - hannes.

これでもわかるように「ドレミ」は音と音の関係を示すいわば「音のステータス」を音名に与えるものだったのです。本来「ハ」の音には261.63Hz(及びその倍数)の意味しかなかったものに「主音」や「属音」などのステータスを与えることにより【調】の概念が付加されたのが【ドレミ=階名】の概念なのです。

この【ドレミが階名で八二ホが音名】という当たり前のことが指導者である教師にもよくわかっていないのです。

ですから冒頭の「ファがドになる」という意味不明の日本語が登場したわけです。

この件については日本の音楽教育学会でも長年論争の中心にされてきましたが、昭和62年静岡大学で行われたこの論争のファイナルマッチにおいて「固定ド唱法も可とするが移動ド唱法が望ましい。白鍵読みや八調読みは非教育的かつ非音楽的なので誤りであるとし認められない。」との結論が出たことをここに再確認します。